

## 情報行動におけるメディア利用の類型化と利用者の特徴に関する分析

宇留野 太一

先に述べた通り、情報化の進展でメディアが多様化するとともに、それらを利用する環境が整ったことにより、デジタルネイティブやデジタルシニアといったデジタルメディアを使いこなす利用者層が現れた。しかし、依然として情報化に伴う問題は残っており、その実態について把握する必要がある。そこで本研究では、日本人のメディアの利用頻度に着目し、情報行動におけるメディアの利用を類型化し、その特徴とそれに属する利用者の特徴について分析する。本研究は、各メディアに着目するだけでなく類型化することで、マクロな視点で情報行動におけるメディアの利用の実態を捉えることができると考えられる。本研究の第1の目的は、多様化するメディア利用とその利用者の特徴を明らかにすることである。第2にメディアの利用という点から情報格差について議論を試みる。

本研究では、現代における情報行動におけるメディアの利用について類型化するだけでなく、経年変化における比較を行う。分析は国立国会図書館が2014年と2019年に実施している「図書館利用者の情報行動の傾向及び図書館に関する意識調査」の回答データを用いてクラスター分析を行う。分析により得られたクラスターの特徴については、クロス分析を基に $\chi^2$ 検定を行い、有意差が認められた項目においては残差分析を行い、特徴の分析を行っていく。

分析の結果より、情報行動におけるメディアの利用は、7つの類型に分類することができ、それぞれ「高齢者を中心とする非ネット利用」、「消極的なメディア利用」、「情報発信行動を中心とする積極的なメディア利用」、「若者を中心とするネット利用」、「旧メディアを中心とするメディア利用」、「活発な読書活動」、「読書活動を含む積極的なネット利用」とした。利用者の特徴としては、「情報発信行動を中心とする積極的なメディア利用」に所属している人は、若年層／高所得層／高学歴層という特徴があったのに対し、「消極的なメディア利用」には、低所得／低学歴層という特徴を持つ人が所属していることがわかった。

以上より、メディアの利用について多様化が確認されるとともに、メディアの利用頻度という点において大きな差が存在することがわかった。特に様々な情報行動において、メディアの利用が消極的な人は、当然取得することができる情報の総量が少ないことが予想され、メディアの利用を積極的に行っている人との間で情報格差が生じていると考えられる。さらにこうした人は、所得や学歴が低だけでなく、家族や友人へのコミュニケーションや地域への愛着が乏しいことから、社会的に孤立していると考えられる。

(指導教員 池内淳)